日本：国際社会における教育――バハイの視点

バハイ学術研究会・日本支部、教育研究部会

戦後日本の奇蹟的な復興は前例が無いほどの物質的な幸福を国民にもたらした。しかしそれは一般人の家族、地域そして個人の精神生活に対する意識をどれほど代償にして得たものであろうか。過去五十年の驚くべき物質的成長とはまったく逆方向に道徳は落ち込んでいる。社会の平和と進歩の源となった伝統的な道徳の骨格が崩れはじめている。

この内面的崩壊は、とりわけ政界の腐敗、犯罪と離婚率の増加、さらに最近では世界でもっとも安全な国の一つとして尊敬されていたこの国で、おぞましきテロリズムにまで導ていった。幾つかの国際調査でも、日本は世界で最高水準の収入を誇りながらも、生活に対する満足感や国民の幸福感は、世界でも最も低いとの結果が出ている。一般的に国民はこのような社会状況の中でかなりの我慢をしながらも、他方では脳感覚をマヒさせるアルコール、そして麻薬にまでも手をだすことで時を過ごそうとする若者が増えてきている。そしてさらには目標や意義のはっきりしない、いわゆる宗教の名を借りたカルトや、個人の欲望を満たすことに逃げ場を求めるものもいる。家族、地域、国家さらには世界へ貢献するといった意識は失われつつあるようだ。

ずっと以前にしておくべきであった話し合いが今になって道端で、学問誌で、マスコミや社説、大会の中で多くの危惧する人々の声として聞かれる様になった。日本はどこへ向かって行くのだろう。進展しつつある国際社会の中での役割は何なのだろう。未来に対し、日本国民はどのように準備すればよいのだろう、と。

ある洞察力に優れた日本人のコメンテーターは「日本社会に充満する空虚さ」について指摘した。国際貿易産業省の役員であった堺屋太一は、日本は物質面の目標に重点を置くことから目をそらし、精神的な目標に焦点を当てるべきだと指摘したものの一人である。このような先見性のある思想家達が指摘するように、もし、日本がこのまま進歩を遂げようとするならば新たな精神的原動力を見つけなくてはならないだろう。

しかし一体どのようにすればよいのだろうか。日本は教育こそが長期的な社会発展と卓越性の基盤であると長く認識してきた。この国が明治維新の中頃、つまり１８世紀の末期、ペルシャの道徳教育者アブドル・バハは自国民と世界に向けて助言を書き残している。

> 最も緊急にして主要な必要事は教育の促進である。この最高にして根本的な事柄がなされずして国が繁栄し成功することなどは考えられない。人々の衰退と衰亡の根本的な理由は無知である。今日大衆はごく日常の諸事についてさえも知らず、ましてやこの時代の複雑な必要事や時代の抱えている重要な問題の核心についてはなおさらである。[1]

今日、日本は急速に変化している世界に対応して行けるように国の教育制度を再考し、再設計する必要があると認識している国の一つである。単に伝統的価値と、情報の伝達だけの現状では、人類の可能性や必要事項に対する新たな視点に適応しないという問題に、あらゆる地域での教育制度が、過去数十年にわたって直面してきた。過去に類を見ない、人類の知識の無類の波と伝達の手段は、次に来る世代のために大きく新たな可能性と展望とを創造してきた。しかし、学生を情報に溺れさせることが教育するということではない。善良な世界市民として、彼等が長期的な全世界の問題や、新たな問題のよりよい解決に向けて行動をし、協力的な体制をとるようになる思考は、ただ事実の上に事実を、見解の上に見解を重ねていく教育法では、生まれてこないだろう。教育実験だけでは、なお一層の混乱を招くだけである。すべての国家の教育者は人間個人としての目標と社会全体としての目標についてクリアなヴィジョンを持つ必要がある。二十一世紀の教育を発達させるには基本的な原則が不可欠である。

世界に広がる私どもバハイ共同体のメンバーは、人類全体の幸福に基づいた教育制度と、急速に進展しつつある現代社会とを調和させうる重要なヴィジョンと原則が、バハイの聖典、特に創始者バハオラと解釈者アブドル・バハの綴ったものの中ににあると信じている。

バハオラは現時代を人類の成熟期として説明している。個々の国家から社会のあらゆる本質的側面をふまえた世界的和合への過渡期は、新たなものの到来のために古いものを洗い流す、春先の嵐のように激動したものとなるであろうと彼は述べている。青年が大人になるのを止めることができないように、世界の人々は、この変化を阻止することができないのである。しかしながらこの成熟への過程の円滑さは、現代が私たちに託した課題と責任の認識、そして受け入れ方によるであろう。

世界文明は、人類の一体性の認識の上のみに築くことができると、バハオラは主張した。すべての意味においてこの原則を、歴史や社会経済組織への適応と理解、芸術や科学などあらゆる分野においての態度と目標のために、教育の場ではっきりと示して行かなければなりません。この一体性とは、異なった文化の統合で実現できるものでも、あるいはすべての文化を単一にするものによって達成されるものでもない。それはあたかも人体が単に無造作にかき集めた臓器によって作られたものではなく、それぞれの秀でた性質が互いに補足しあい一つの複合体としてその性質を発揮しようとする内なる力によって成り立ったものであることと相通じる。そうするためには、私たちは自分たち個人としての価値、そして自分たちの文化、そして他の文化の性質も深く理解しなくてはならないのである。

いかなる教育制度であっても、必ず、特定の人の見解によって確立されていき、それは直接的にも間接的にも学習者に伝達されてきた。バハオラはこのように述べている。

人間は最高のタリスマン（護符）である。しかしながら、適切な教育が欠如していたために本来もっているものを享受することができなかった。[2]

そしてさらに、

> 人間を計り知れぬ価値ある宝石に富む鉱山と見なせ。教育のみがその宝を発掘し人類がそれから益を得られるようになすことができるのである。[3]

このタリスマンという言葉は、特別な力をもったものや、より優れたもの、といった意味をもつのだが、私たちがまだ適切な教育を受けていないために、人間本来の可能性を十分に引き出せずにいると、この上の言葉で述べている。では適切な教育とは何なのか。教育は人間の三つの側面に答えたものでなくてはならないとアブドル・バハは述べている。

> 教育には、物質的教育、人間的教育そして精神的教育の三種類がある。物質的教育は身体の健康維持、安楽、休息を得ることによって身体の進歩発達を計ることに関するものである。これは動物と人間に共通である。
>
> 人間的教育は文明と進歩を強調したものである。すなわち、政府の行政機構、慈善事業、職業、技術や手工芸、科学、偉大な発明や発見、そして念入りに作り上げられた社会機構であり、これは動物とは異なる、人間固有の活動である。
>
> 精神教育は・・・神々しい美徳を習得することである。これぞ真の教育である。(4)

この三番目の分野においての教育は英知、善行、誠実、公正を含む。それは人間の気高い性質、たとえば正義、愛、尊厳、忍耐、率先することといった、長所を発達させ、反対に貪欲、利己主義、偏見、やる気のなさなどの短所を良心的に減らして行くことにある。人間の幸福の土台は、人が生きている間、常に投げかけられてくる挑戦に対し、面と向かって対処していきながら、そこから美徳を修めるところにある。生徒を人間性の（教育の第二に当たる）分野に従い教育して行けば、知識に決断力そしてやる気が身に付き、自然に道徳性の高い人生を選ぶことにつながると考えている者もいる。しかしながら過去から現在に至るまでの歴史を見ると、基礎的に十分な道徳教育を受けずに高学歴を得た人が、社会に対し、意図もたやすく恐ろしい脅迫になりうるということが明らかである。アブドル・バハはこう書いている。

> 道徳と善行をしつけることは書物上の学問よりもはるかに重要である。清潔で愛想がよく、立派な人格を持つ、行儀の良い子は—たとえ無知であったとしても——無作法で、汚くいじわるだけれどもすべての科学や教養に精通している子供よりましである。なぜなら立派にふるまう子供はたとえ無知であったとしても他人のためにはなるけれども意地悪で行儀の悪い子供は、たとえ学識があっても、堕落していて、他人に害を与えるからである。しかしながら、学識があり、しかも善良であるように子供が訓練されるなら、結果は光の上にさらに照らされた光である。(5)

次のように世界を包みこんだ視野をもつこの道徳指導者は、学校の三つの主要な義務について説明した。

> 第一に、無知の源を絶ち、純科学の限界の壁を常に乗り越えて行くように、教育という大義に心して取り組んで行くべきである。
>
> 第二に、道徳の進歩に取り組んで行くべきである。
>
> 第三に、人類の一体性の確立に努めるべきである。そうすれば生徒達は、宗教や人種の違いにもかかわらず、全人類を自分の兄弟として確実に意識するであろう。(6)

個人レベルでは、教育が最も深い影響をもつだけに、肉体と精神の様々な能力がバランスよく訓練されねばならない。肉体も感覚も使い、理解力、判断力、想像力に記憶力を養い、そして科学と同様に芸術面も訓練する必要がある。また、教育機関は生徒が個人として、あるいは様々なグループの中で協力的に学んで行けるように育てねばならない。また、過去の伝統には存在しなかった平和で安全な、正義の確立された地球をつくりあげなくてはならない現代の学生は、その過程において様々な問題に直面するであろう。それゆえ学生は柔軟な精神に加え、世界に向けての幅広く深い視野をもたなくてはならないのである。

独自で真理の探究をするよう養成された学生は、多様な社会が直面する複雑な問題を解き明かす鍵となる。多様性の中の和合という原則を認識するということも同時に必要である。まず各々の人間は、社会全体が必要としている特性を知らされねばならないし、すべての人々のための正義、平和、福祉そして幸福を目指して、各々が自分の才能と特性を伸ばし、役立てようとするように準備する必要がある。また、バハイが奨励し、教育カリキュラムの柱の一つとして、また重要な側面として見ているものに、学んだ事柄をそのままボランティア活動としてのプロジェクトに変え、地域、国家そして世界へ役立てて行くというものもある。

人間の精神的、道徳的面においての教育の本質の一つには、特に学生に世界の偉大な宗教の基礎的な英知、歴史、法律、そして習慣を教える必要がある。世界の普遍的な宗教はすべての文明の道徳の基盤を築いてきた。他の文化や考え方を理解するためには、宗教について学ぶことが不可欠である。バハイはおびただしい数の宗派の偏狭な考え方を、若い者の頭に「植え付ける」様なことはするべきでないと思っている。むしろ様々な文化の豊かな歴史、聖典、そしてあらゆる文化の根底に共通して見られる真理などを幅広く、そして敬意をもって学ぶように、学生に教えるべきだと考えている。賢人や偉大な聖人の人生を、伝記をとおして学ぶことは、生徒に自分と人生について考えるための幅広く深いきっかけを与え、また個人としての成長を促し、世界へ貢献するための指針となる。教育者がこの分野において困惑しているがゆえに、教育の中で宗教を無視するということは、その重要性についての真理を誤り伝えることにもなり、さらには生徒が自分の文化や他文化を不十分に理解した状態で放置されることにもなるのである。宗教の基礎的な知識やその歴史を知らずしては、教育者も生徒も人生の意義への深い問いについて考える手段も得る事が出来ない上に、精神的あるいは道徳的な問題に関してぶつかりあう様々な意見の波のなかで、進路を決め進むこともできないのである。

バハオラの教えの中には、教育の問題を前向きな姿勢で解決してゆくために、協議という原則がある。協議とは真理の探究のための有効なアプローチであり、反対派やグループの和を乱さずに、複雑な問題を想像的に、かつ、効果的に解決するのに有効な方法である。教室の子供がこの方法を利用してみたところ生徒たち自身が自分の教育過程に活動的にそして協力的に取り組むようになった実績がある。異なる背景、興味そして能力をもった生徒たちが、クラスの中でも外でも、様々なプロジェクトにおいて、ともに問題について話し合い、事実を追及し、その根底にある原則は何なのかを認識し、調和のとれた解決を見つけることができるようにするのが協議なのである。この方法により、グループ内の一人一人がもつ才能と性質が認められる、非競争的な雰囲気が作られ、現代の教育機関が抱える、いじめや子供の孤立などの問題から守られるのである。

教室のみならず、この協議に対するアプローチは、世界的な行政機構のなかでの決定や決断をする過程に実際、使われている。ECOSOC（国際連合経済社会理事会）の諮問機関であるNGO（非政府機関）のバハイ国際共同体は、この過渡期における複雑な問題に積極的に、かつ熱心に、あらゆる地域の誠実な人々と共に、調和のとれた解決をもたらそうとしている。この地球上のあらゆる国家、人種、文化、そして民族からなる、五百万人以上のメンバーをもつバハイ国際共同体は、一世紀以上にわたり、各地域で教育制度の改善に努めてきた。現在、世界中に１７８のバハイ普通学校、４００を超える特別学校、数百のマイナーなバハイ的教育プロジェクトが存在する。現在の日本におけるバハイの数は少ないが、その精神や展望は世界中で受け入れられている。我々は、バハオラの言葉が実現でき、そして日本においての世界市民の養育と発展のためなら、どこであろうとも、我々のものの見方、経験、思想を分かち、奉仕をしたいと望むものである。

> 汝等は自らの心と意思とを地上の民の教育に傾け、人類の分裂をもたらす不和が、最大なる御名の威力を通じて、この地球上より排除されるよう努力しなければならない。されば全人類は一つの秩序の支持者となり、一つの都市の住民となるであろう。(7)

注

1. 'Abdu'l-Baha, *Secret of Divine Civilization*, p. 109.
2. Baha'u'llah, *Gleanings from the Writings of Baha'u'llah*, p. 259.
3. Baha'u'llah, *Gleanings from the Writings of Baha'u'llah*, p. 260
4. 'Abdu'l-Baha, *Some Answered Questions*, p. 10
5. 'Abdu'l-Baha, *Selections from the Writings of 'Abdu'l-Baha*, p. 135-36
6. 'Abdu'l-Baha, (From a statement made to President of American College of Beirut, Syria)
7. Baha'u'llah, *Gleanings from the Writings of Baha'u'llah*, p. 333-34